

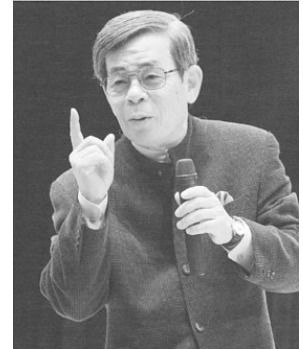


IWAMI CHISUIKAN HIGH SCHOOL IWAMI CHISUIKAN HIGH SCHOOL IWAMI

江津市が主催する、人権同和教育講演会に参加してきました！
8月5日に江津市総合市民センター（ミルクウエイホール）を会場として開催された人権・同和教育講演会の内容をご紹介します。

《演題》： 差別するがわ・されるがわ
「**恥ずかしいのはどっちだ**」
～差別・いじめの仕組み（メカニズム）を考える～

《講師》： 江嶋修作（解放社会学研究所 所長）



「3つの“た”」

今までに様々な人々が様々なところで人権・同和教育をおこなってきた。しかし、実際差別やいじめは無くなってきているのだろうか？

講師はこの疑問を常に抱えてきた。その結果、たどり着いた結論として、巷で行われている人権・同和教育が抱える大きな問題点を3つ指摘する。それは「**建て前、(みけんの)縦じわ、他人事**」であるという。

まず「建て前」についてだが、差別やいじめが人の尊厳を傷つける行為である以上、その非を指摘し理想に基づいたあるべき姿勢を提示することは大切だが、現場の人権・同和教育のほとんどがそれだけで留まっており、いじめや差別は、する側の恥ずかしい心根から生じる問題であって、それを積極的に正すことが今求められている（部落差別解消推進法などの制定もその一環）と訴えた。部落差別というのはなぜあるのか。多くの人が、部落があるから部落差別があると錯覚を起こしているが、そうではなくて「あれは、部落だ」と言って差別をする人がいるから部落差別があるのだ。

また「縦じわ」については、部落差別の歴史的背景や経過を学習する際に、虐げられ、貶められたというイメージで、悲惨さを殊更に強調するばかりの手法がとられてきたことに対し、誤ったイメージを刷り込むことになると批判する。以前、本校にも講演に来られた高田美紀さんのように、明るくさらっと差別を語りあえる感覚こそが大切ではないかとも思う。

さらに「他人事」についてだが、差別問題に対してやる事は二つに一つしかない。助けようと何か「具体的に動く」か、「知らないふりをしてやり過ごす」かしかない。例えば結婚・就職差別をうけて、「死にたい！」と思っている人が現実にいる。そういう差別を無くすために、「具体的に何かをやる人」と、「私は差別する気はないですよ、私には差別意識ないですよ」と言って「何もやらない人」と、この二つに分かれるだけ。いくら「私は差別するつもりはありません」「差別はいけない！と思ってますよ」と心の中で言っても、差別を無くすために具体的に何らかの事をしてない限りは、差別されている人を見捨てて通り過ぎるのと全く一緒なのだ。

差別というのは、差別される側に責任があるのではなくて、差別する側の人間達が差別される人達をどのように見るか？これにかかっている。それを多くの人々はすぐ、差別される側に責任をかぶせそうになる。それは、自分が差別してしまう事をごまかし、その「ごまかし」を正当化しようとする理屈が伴っている。「アレらの態度がどうだ、ものの言い方がどうだ」と、すぐそっちの方へ問題を持っていこうとする。差別問題は、ひとごとではない、他人事にしてはならない。なぜなら、差別とは、差別するひとりひとりの人間の自分の中に溜ってるモノの問題だからである。そのことを説明する一つの原理を、「フラストレーションの内調整のメカニズム」という。自分の中に溜ったフラストレーションを自分の中で、心理的に納得させ、正当化するために、今言ったようなメカニズムが働いていくということなのだ。

「差別を無くそう」「つまらん生き方はやめよう」と本当に思って、差別を無くす方向で生きて行くためには、実はもう一つ、「『ひと』への共感（人への想像力）」が必要である。ひとりひとりの人間たちが、どんな思いで生きてるか、それに対する想像力と言い換えても良い。被差別部落の人が差別され、その事を通して持っている「憤り」、「悲しみ」、「怒り」、そして、それを跳ね返す時の「喜び」、そういったものを一つづつ「ひと」としてどれだけ感じ取ることができるか。「理解する」のではなく、ただ、「ひと」の喜びを喜びとして、「ひと」の悲しみを悲しみとして、「ひと」の怒りを怒りとして、どこまで感じ取るか。これが、差別問題を考えるときのポイントである。

今回、江嶋さんの講演を聴いて、一つ一つの言葉やエピソードが心にグサッと突き刺さるような気がした。しかしそれは今後の自分にとって大切な痛みであり、決して忘れてはいけないことだと思った。

人権同和教育部：松村建